

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

「原爆被爆者の放射線影響調査に関する科学史的研究」

(課題番号 : 20500871)

研究成果報告書

研究代表者 : 柿原 泰 (東京海洋大学 海洋科学部 准教授)

原爆調査の歴史を問い直す

NPO 法人市民科学研究室・低線量被曝研究会

2011年3月

目次

序 原爆調査の歴史を問い直す	1
----------------	---

第1部 日米の初期原爆調査を再検証する

はじめに

第1章 米軍占領下の原爆調査・その再検証——1945年を中心に	10
第2章 米軍資料からみるマンハッタン調査団日本派遣の経緯	32
第3章 米軍による初期調査報告の「ごまかし」	53
第4章 原爆調査以前の都築正男——日本軍の中国侵略との関わり	65
第5章 戦争犯罪裁判関連資料として保管された原爆調査資料	85

おわりに

第2部 関連資料および年表

1945年当時の原爆調査に関する米軍通信資料—Atomic Bomb Mission ～GHQ/SCAP資料より～	101
日米原爆調査関連年表	139

第3部 研究ノートおよび付録（再録）

原爆調査と科学者・医学者——加藤周一の場合	（笹本征男）	157
ヒロシマ・ナガサキとヒトゲノム計画	（笹本征男）	176
インタビュー「市民の科学をひらく」第5回—占領下の原爆調査が意味するもの	（笹本征男 聞き手・上田昌文）	213
広島・長崎の原爆調査関係地訪問記	（柿原泰・瀬川嘉之）	233
長崎原爆 投下の経過を再構成する	（桑垣豊）	255

序 原爆調査の歴史を問い直す

本報告書は、2008年度～2010年度の3年間にわたり日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究（C）の助成を受けて進められた研究課題「原爆被爆者の放射線影響調査に関する科学的な研究」（課題番号：20500871、研究代表者：柿原泰）の研究結果報告書である。当初研究計画に掲げた課題からすると、ここに収録できたものはごく一部分にすぎないが、助成期間の終了をひとつの区切りとして、現時点までにまとめることのできた研究成果を報告するものである。今後も引き続き研究を進め、残された課題についても随時、公表していきたい。

研究の目的と背景

まず、本研究の目的と背景について述べておく。

1945年8月6日、9日、広島・長崎に米軍が原子爆弾を投下して以降、その直後から原爆の効果（影響）に関する調査、原爆被害者（被爆者）たちに対する調査がさまざまになされてきた。原爆調査は、原爆投下直後の日本側の初動調査から始まり、学術研究会議原子爆弾災害調査研究特別委員会という国家的大規模調査団の設立などに見られる多数の日本人科学者・医学者による調査が、米国への調査協力として進められた。その後、米軍占領期にはABC C（原爆傷害調査委員会）が設置され、日米両国による調査が継続・実施された。それは、1975年に放射線影響研究所（放影研）に引き継がれ、現在に至るまでその調査は続けられている。

これらの原爆被爆者調査は、どのような調査研究を行ってきたのか、それは何のため、誰のために行なわれたのか、調査・研究の結果はいかに活用されたのか。本研究は、それらについて科学的観点から解明すること、そしてそれらが現在に及ぼしている影響を考え、その意味を問い直すことを目的とする。

現在まで60年以上にわたって続けられている原爆被爆者の調査について、その歴史の全貌を解明するのは、短期間のうちには到底、困難であるので、本研究では、できるだけその全体像を概括的に把握することに努めるとともに、ポイントを絞って研究を進めていくべく計画を立てた。

原爆をめぐる歴史については、多方面からの研究が数多くあるが、本研究で注目する原爆調査に関する歴史的研究はあまりない。先駆的研究としては、科学史家・中川保雄（1943～1991）と占領史研究家の笹本征男（1944～2010）の研究を挙げなければならない。

中川保雄「広島・長崎の原爆放射線影響研究——急性死・急性傷害の過小評価」、『科学史研究』第25巻No. 157（1986年）などの諸論文や遺著『放射線被曝の歴史』（技術と人間、1991年）などは、放射線影響研究の歴史に関する先駆的研究であるとともに、原爆調査に関してこれまで語られてきたことに対して批判的な歴史研究に踏み込み始めた画期的研究と言える。これら一連の中川保雄の研究にも刺激を受けた笹本征男が、原爆調査に関する詳細な歴史的研究をまとめたものが、笹本征男『米軍占領下の原爆調査——原爆加害国になった日本』（新幹社、1995年）である。この本は、本研究のベースとなるものである。著者の笹本征男は、その後も原爆調査について鋭く問い続けていた¹ところ、後述するように市民科学研究室の低線量被曝研

研究会において私たちは共に勉強・議論をするようになった。(だが、残念なことに、笹本征男氏は2010年3月20日に逝去されてしまったため、本報告書の取りまとめの最終段階には加わっていただくことはできず、完成したものを読んでもらうことも叶わなくなってしまった。)

他方、米国の科学史研究において挙げなければならないものとしては、Susan Lindee, *Suffering Made Real: American Science and the Survivors at Hiroshima* (Chicago: The University of Chicago Press, 1994) をはじめとする同著者の諸論文や John Beatty, "Genetics in the Atomic Age: The Atomic Bomb Casualty Commission, 1947-1956," in Keith R. Benson, et al. (eds.), *The Expansion of American Biology* (New Brunswick: Rutgers University Press, 1991) をはじめとする諸論文などがあり、ABCや米国における放射線影響研究に関する科学史的研究はさらに近年も出続けている。(なお、スーザン・リンディーの著書の邦訳がまだ現れていないのは残念である。笹本征男は上田昌文と協力し、数年前に既に大半の訳稿を準備されていたが、著作権の関係で、出版の話は進まなかった。)

こうした先行研究を踏まえつつ、本研究では、当初、次のような課題を検討する計画を立てた。

原爆調査の初期については上記の笹本征男の著書に詳しいが、60年以上にわたって続けられている被爆者調査の歴史の全体像を概括しておくために、初期の原爆調査から現在の放影研に至るまでの膨大な報告書群の収集とそれらの概括的整理、そして例えば死亡率調査(生涯追跡調査)に絞るなどして内容分析に部分的に踏み込むことも課題とした。さらに歴史的アプローチのみならず、被爆者調査の結果がいかに活用されているのかという現在の関心から、放射線被曝リスクをめぐる研究の現状の把握と、そうした研究に関する科学的・応用倫理的研究を行なうことも課題とし、リスク論に関する科学論や放射線影響に関する応用倫理学的研究(例えば、Kristin Shrader-Frechetteの諸論文)の検討を進めることとした。

それらの諸課題について検討を進める際に、議論の場となったのが市民科学研究室の低線量被曝研究会であり、以下に述べるような経緯から、本報告書では、主として1945年段階における日米の初期原爆調査に関して、笹本征男『米軍占領下の原爆調査』をベースとしつつ、さらに資料調査や諸々の検討を加えた論考をまとめることとした。上記の他の諸課題については、今後、別途、研究成果について発表していきたい。

研究の経過——低線量被曝研究会の活動を通じて

本研究を進めるにあたっては、NPO 法人市民科学研究室の低線量被曝研究会で開催する勉強会が議論の場となった。そこで、本研究の計画立案以前に始まっていた低線量被曝研究会についてまず簡単に紹介したうえで、本研究報告書をまとめるに至った経緯について述べることにする。

低線量被曝研究会は、市民科学研究室代表の上田昌文の呼びかけのもと、2003年12月に行なわれた打ち合わせ準備会を経て、2004年1月から始まった。それからほぼ月1回のペースで勉強会を開いており、参加者は多少入れ替わりながらも、だいたい5~10名くらいで現在まで続いている。

勉強会で初めに取り組んだのは、ECRR(欧州放射線リスク委員会)2003年勧告という報告

書の読解だった。放射線被曝のリスクを見積もり、国際的な防護基準を取りまとめている ICRP（国際放射線防護委員会）のリスク評価モデルに対して、それを見直そうとする試みを ECRR は提示していた。2005 年 1 月 26 日に第 167 回土曜講座「低線量放射線被曝のリスクを見直す」と題する公開講座を開き、勉強会での成果を発表し、その記録は、『どうよう便り』第 85 号（2005 年 3 月）に掲載している²。

その後、前述の ICRP が 1990 年勧告から久方ぶりに新勧告を準備しているという情報に接し、その動向を追いつつ、米国科学アカデミー／国家研究評議会の下に設置されている BEIR（電離放射線の生物学的影響）委員会が出した第 7 報告書（BEIR VII）に着目し、その冒頭部の概要を勉強会メンバーで訳出した。その解説は、『市民科学』第 13 号（2006 年 7 月）に掲載され、邦訳は市民科学研究室ホームページに掲載しているので参照されたい³。

そうした放射線リスクをめぐる科学と社会の現状をフォローするなかで、放射線被曝のリスク評価には、広島・長崎の被爆者のデータが重要な役割を果たしていることもわかり、この問題を根本的に考えるためには、やはり 60 年以上にわたる原爆被爆者調査の歴史をじっくりと腰を据えて取り組むべきであろうと考えるようになった。

そう考えるにいたったのは、もちろん研究会のメンバーの 1 人であった笹本征男の存在が大きかった。その笹本氏が取材協力した NHK の番組に関連させて、番組ディレクターであり、研究会の一員にも加わるようになった NHK 広島局（当時）の松丸慶太氏を招いて、2007 年 10 月 19 日に第 22 回市民科学講座『「被爆者 空白の十年」から考える——日米合同原爆調査は誰のために？』を開催したことも、本研究の計画立案をおおいに鼓舞した。

このようにして、低線量被曝研究会では、原爆調査の歴史を問い直すことを課題として、勉強会を重ねていたなかで、2008 年度から科研費の助成を受けることができたわけである。

低線量被曝研究会がこの 3 年間の助成期間中に行なった活動について、ほぼ月例の勉強会の他のいくつかの活動を簡単に紹介しておく。

2008 年 4 月の勉強会では、『封印されたヒロシマ・ナガサキ——米核実験と民間防衛計画』（凱風社、2008 年 2 月）の著者・高橋博子氏をお招きし、ご著書をめぐって議論を行なうことができた。⁴

2008 年 8 月 2 日には本研究会の企画として第 28 回市民科学講座「戦時下の科学——ドキュメンタリー『よみがえる京大サイクロトロン』を見て」を開催した⁵。

2009 年 3 月には、科研費の援助を受けて、本研究会メンバーで広島（および瀬川のみ長崎も）を訪問した。その報告については、『市民科学』第 25 号および第 26 号に掲載したが、本報告書第 3 部にも再録した。

2009 年 7 月 20 日には、講師に桑垣豊氏を招き、「長崎原爆 投下の経過を再構成する」と題する公開学習会を開いた。その報告については、『市民科学』第 25 号に掲載し、本報告書第 3 部にも再録した。（桑垣氏は、この後、研究会メンバーの一員に加わった。）

また、低線量被曝研究会について、原子力資料情報室の英文ニュースレター『Nuke Info Tokyo』で紹介された⁶。

研究会がスタートしてからこれまでに低線量被曝研究会に参加したメンバーは他にも数名い

るものの、本報告書に関する研究を進めてきたメンバーは、以下の通りである。

上田昌文（市民科学研究室・代表）

笹本征男（占領・戦後史研究会、在韓被爆者問題市民会議・前代表、2010年3月20日没）

瀬川嘉之（高木学校、シュレー大学）

吉田由布子（「チェルノブイリ被害調査・救援」女性ネットワーク事務局長）

渡辺美紀子（原子力資料情報室）

桑垣豊（近未来生活研究所）

柿原泰（東京海洋大学、本科研費・研究代表者）

その他、次に述べるように、笹本征男、吉田由布子を始め、低線量被曝研究会として、NHKスペシャル「封印された原爆報告書」の番組制作にあたって、取材協力した関係で、

松木秀文（NHK 広島局ディレクター）

土門稔（NHK 取材スタッフ）

の両名も研究会に参加していた。

本研究を進めていくうちに、笹本征男の著書『米軍占領下の原爆調査』で占領期については既に研究がなされているから、その時期以降のABC、放影研による調査について研究すればよい、というのではなく、再度、占領下の初期の原爆調査に焦点をあてて、資料を読み直し、新たな資料を探して検討することにした。それは、本研究にとって初期原爆調査についての視点を確立することがそれだけ重要であると考えたからだが、加えてこの番組制作への協力も本研究を進めるのにおおいに刺激になった。

結果として、初期原爆調査を中心として本報告書をまとめることにした。

NHK スペシャル「封印された原爆報告書」

2010年8月6日放送されたNHKスペシャル「封印された原爆報告書」は、NHK広島局のディレクター松木秀文氏が笹本征男の著書『米軍占領下の原爆調査』に触発され、笹本氏本人の取材協力も得ながら企画が練られ始めたと聞いている。その後、ディレクターの松木氏と取材スタッフの土門稔氏が、低線量被曝研究会の定例勉強会にも参加されるようになり、研究会メンバーとともに資料の紹介・検討や議論を重ねた。第1部の論文の注にも記されているように、番組取材の過程で調べられた資料をご教示いただき、本研究でも利用させていただいた。

出来上がって放送された内容は、番組を直接ご覧になっていただきたいが、ここでは参考までにNHKのホームページから番組紹介を引用しておこう。

「アメリカ国立公文書館のGHQ機密資料の中に、181冊、1万ページに及ぶ原爆被害の調査報告書が眠っている。子供たちが学校のどこで、どのように亡くなったのか詳しく調べたもの。200人を超す被爆者を解剖し、放射線による影響を分析したもの…。いずれも原爆被害の実態を生々しく伝える内容だ。報告書をまとめたのは、総勢1300人に上る日本の調査団。国を代表する医師や科学者らが参加した。調査は、終戦直後から2年にわたって行われたが、その結果はすべて、原爆の“効果”を知りたがっていたアメリカへと渡されていたのだ。

なぜ貴重な資料が、被爆者のために活かされることなく、長年、封印されていたのか？ 被爆から65年、NHKでは初めて181冊の報告書すべてを入手。調査にあたった関係者などへの取材から、その背後にある日米の知られざる思惑が浮かび上がってきた。

番組では報告書に埋もれていた原爆被害の実相に迫るとともに、戦後、日本がどのように被爆の現実と向き合ってきたのか検証する。」⁷

本報告書の構成

以下、本報告書の全体は、3部から成る。第1部は、5つの章から成る論文である。第2部は、第1部の論文において利用したGHQ/SCAPの“Atomic Bomb Mission”ファイル資料を翻訳して紹介し、また第1部に関連した日米の原爆調査に関する年表を取めた。第3部には、低線量被曝研究会の定例勉強会で発表されたレジュメや、『市民科学』誌に既発表の論考や報告など、関連するいくつかのものを再録した。

本報告書を故・笹本征男さんに献げます。

(柿原 泰)

¹ 例えば、笹本征男「チェルノブイリ原発事故と日本への影響」、中山茂・後藤邦夫・吉岡斉編『通史 日本の科学技術』第5巻-I(学陽書房、1999年)所収、279-291頁。

笹本征男「放射線影響研究所と原爆被爆者」、中山茂・後藤邦夫・吉岡斉編『通史 日本の科学技術』第5巻-I(学陽書房、1999年)所収、319-334頁。

笹本征男・若松征男「ビキニ事件と日本の原子力開発(1)」、『東京電機大学理工学部紀要』vol. 20(1998年11月)、13-24頁。

笹本征男・若松征男「ビキニ事件と日本の原子力開発(原子力平和利用)(2)」、『東京電機大学理工学部紀要』vol. 21(1999年10月)、29-38頁。

また、最近のものでは、

笹本征男「原爆加害国になった日本——米軍占領下の原爆調査から 第1回：原爆被害調査の真実」、『軍縮地球市民』no. 1(2005年6月)、88-99頁。

笹本征男「原爆加害国になった日本——米軍占領下の原爆調査から 第2回：被害国日本の大調査プロジェクト——何のための、誰のための調査か」、『軍縮地球市民』no. 2(2005年9月)、160-167頁。

笹本征男「原爆加害国になった日本——米軍占領下の原爆調査から 第3回：乳幼児・妊産婦をモルモットに、日米共通の国益とは?」、『軍縮地球市民』no. 3(2005年12月)、158-163頁、などがある。

² 市民科学研究室・低線量被曝プロジェクト「低線量放射線被曝のリスクを見直す——『ECRR報告書(欧州放射線リスク委員会2003年勧告)』をふまえて、『どう使い』第85号(2005年3月)、2-14頁に掲載。その内訳は、西尾信一「放射線ホルミシスと放射線影響」(2-5頁)、笹本征男「ヒロシマモデル批判」(6-7頁)、柿原泰「ECRRの背景と放射線の線量規制にかかわる国際・国内諸機関」(8-10頁)、瀬川嘉之「ECRRメカニズム」(11-12頁)、上田昌文「ECRR報告書——その論理の構造を読み解く」(12-14頁)。

³ 柿原泰「低線量放射線被曝リスクをめぐる最近の動向——BEIR VII報告を中心として」、『市民科学』第13号(2006年7月)、20-21頁。BEIR VII報告の概要邦訳は、2011年3月現在、市民科学研究室のホームページにおける市民研アーカイブスのカテゴリ「低線量被曝」(<http://archives.shiminkagaku.org/archives/105/>)に収められている。

⁴ なお、同書の書評を研究会メンバーの瀬川嘉之が『市民科学』第16号(2008年5月)に、笹本征男が『科学史研究』第249号(2009年3月)に発表しているので、参照されたい。

⁵ その報告は、『市民科学』第20号(2008年11月)を参照されたい。

⁶ Mikiko Watanabe, “Group Introduction: Citizen Science Initiative Japan, Exposure to Low Level Radiation Research Group,” *Nuke Info Tokyo*, no. 138 (Sep./Oct. 2010), p. 16.

⁷ <http://www.nhk.or.jp/special/onair/100806.html> より、2011年2月27日最終確認。